2026 年 8 月 21 日

国際原油市場のニューノーマル

一般財団法人日本エネルギー経済研究所
計量分析ユニット　担任
理事　久谷 一朗

米国とイランの紛争は未だ先行きが見通せない。武力衝突こそ鳴りを潜めたものの、双方がホルムズ海峡を封鎖しあう状態が続いている。イランは海峡を管理する権利を主張し、米国はそれを許さないとする。互いに譲る気配はみられず、膠着状態となっている。長引くホルムズ海峡の封鎖は、日本を含む世界の石油輸入国を不安にさせている。一部の国では石油供給を巡る混乱が続き、またブレント原油価格も再び 1 バレル当たり 90 ドル前後に上昇している。しかし、4 月頃の 130 ドルを超える高値と比較すると価格の上昇は緩やかに見える。世界は危機に慣れてしまったのだろうか。それとも、ホルムズ海峡の封鎖が現実の石油供給にはそれほど影響を及ぼさないようになったのであろうか。

ここで興味深い数字を紹介したい。ホルムズ海峡の封鎖によって失われた原油供給量は日量約 1500 万バレルである。よく知られているとおり、サウジアラビアと UAE には海峡を迂回する原油パイプラインがあり、その輸出能力はそれぞれ日量約 500 万バレルと約 180 万バレルである。そして驚くべきことに、報道などによると、封鎖されているハズの海峡を通って日量 500 万バレル程度の原油が今も世界に輸出されているという。これらを足し合わせると、現在も日量 1180 万バレルの原油がペルシャ湾岸から輸出されていることになる。日量 1500 万バレルには届かないが、失った量の 8 割弱の供給が戻っている計算になる。

これが事実であるとすれば、ホルムズ海峡の封鎖は、考えられていたほどには現実の石油供給に影響を及ぼしていないということになる。加えて、UAE は 2027 年の運転開始を目指して迂回パイプラインの能力増強（日量 150 万バレルの追加）を進めている。サウジアラビアやイラクも、経済の屋台骨である石油輸出収入を確保するために海峡迂回パイプラインの能力強化を考えるだろう。さらには、米国など非ペルシャ湾岸での原油生産が継続的な増加基調をとるようになれば、将来はホルムズ海峡封鎖の影響を解消することも視野に入る。言い換えると、イランが持つホルムズ海峡カードを無力化することができる。

もちろんこのシナリオには様々な不確実性がある。ホルムズ海峡カードの無力化を回避したいイランは、封鎖をかい潜る船舶の管理を強化しようとするだろう。また、イランに同調する勢力の助けも借りながら、迂回パイプラインへの攻撃や、バーブルマンデブ海峡やスエズ運河の通航を危険に晒すことを考えるだろう。加えて、ウクライナ戦争の影響でロシアか

らの石油輸出が滞る例でも分かるとおり、非ペルシャ湾岸産油国の原油生産にも様々なリスクがある。更には、供給側のみならず、石油需要の伸びや石油製品ごとの需給バランスの問題も無視してはならない。

それでもなお、ホルムズ海峡封鎖の影響が考えられていたよりも小さいとすれば、未曽有の危機が続く中での僥倖であろう。今後迂回パイプラインの拡張や非ペルシャ湾岸での石油増産が進むことによって、ホルムズ海峡の封鎖がもはや大きなリスクとはならない、国際原油市場のニューノーマルが実現することを期待したい。

お問い合わせ: report@tky.ieej.or.jp